

西南シルクロードと焼畑的水田稲作からひもとくヒマラヤ 東部—地域体系研究の端緒として—

安藤和雄

京都大学東南アジア研究所

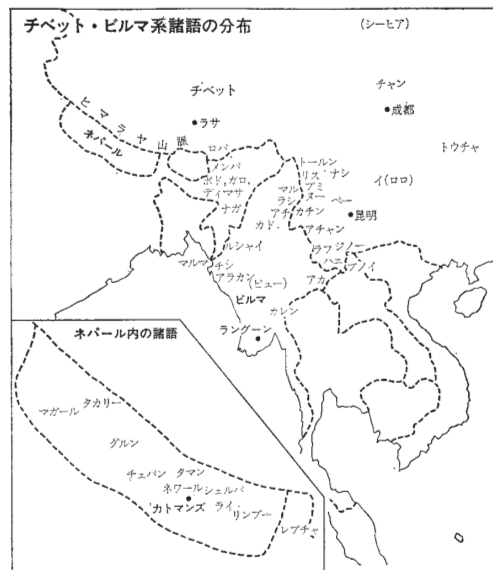
1. はじめに—問題設定—

中国雲南省紅河県のハニ族は、棚田を自らの文化だと自称している⁽¹⁾。中国では、哈尼(以下ハニ)族は、紀元前7世紀頃チベット高原で牧畜をしていた古代人羌(以下キョウ)を祖先とし、南下してきた人々だと考えられている⁽²⁾。しかし、はっきりとしたことは分かっていない。ハニ族は、彝(以下イ)族などと同じくチベット=ビルマ語群であり(語群と語族の分類は、『中国少数民族事典』にならった。ただし引用文では原文のままとした)⁽³⁾、そのルーツにチベットとの関係をつよもっている。チベットから雲南へは、中国領内のチベット高原からの南下ルート以外にもトラバースルートとでも呼べる道がある。チベットからは、スバンスリ(Subansuri)などのブラマプトラ川支流沿いに南に下り、ブラマプトラ河谷であるアッサムを経由し、ミャンマー領を横切る道である。チベット=ビルマ語群諸民族は、現在では、雲南以上に、ヒマラヤの南山麓であるネパールからアッサム・ブラマプトラ川流域、ミャンマーに広く居住地域を広げ、長い歴史の中でさまざまに独自の言語を派生させていった(図1)。西南シルクロードに重なるトラバースルートに沿うようなチベット=ビルマ語群諸民族の広がりは、図1から理解されるように、東南アジア大陸部と同等あるいは、それ以上の地理的範囲をもっている。山地と高原に適応したチベット=ビルマ語群諸民族の世界とでもいえるヒマラヤ東部の広がりが、雲南とヒマラヤを結ぶこととによって明確な輪郭を現してくる。

本稿では、まず、文献資料により、トラバースルートに重なる西南シルクロードの存在を指摘し、ハニ族の移動ルーツと棚田文化を推論することで、アッサム・ブラマプトラ河谷におけるチベット=ビルマ語群の諸民族の分布と定着の意味を探る。次に、この推論を前提に、インド、アルナチャー

ル・プラデーシュ州のローア・スバンスリ(Lower Subansuri)県・ジロ(Ziro)地区のアパタニ族の焼畑的水田稲作や稲作起源伝説をハニ族と比較検討し、チベット=ビルマ語群諸民族の移動と定着が中核となって形成してきたヒマラヤ東部の広がりを考えてみたい。

私は2006年度総合地球環境学研究所プロジェクト「高所環境—人の生老病死と自然、生態、文化との関連—」(代表・奥宮清人)に参加し、プロジェクトの研究会で地域体系という地域の捉え方を提唱した。いまだ定義が確立せず、言葉だけが先行しているが、各地域は、有機的、機能的に



チベット、ビルマ系諸語の原郷は、ヒマラヤ山脈の北側といわれる。チベット、ネパール、雲南を中心とする中国南部、ビルマ、インドのアッサムに分布する。

図1 チベット=ビルマ語群の諸語の分布(出所:桑原正則『東南アジアの民族と言語文化』穂高書店1989)

連結しながら歴史的、空間的に体系化され、地域体系をつくることで存在しているという発想である。ヒマラヤ東部は、まさに一つの地域体系を形成していると私は考えている。体系を構造的に支えている大きな要素の一つがチベット＝ビルマ語群諸民族の存在であり、交易や移住、交流の人の移動の道であったといえるのではなかろうか。本稿は、ヒマラヤ東部を地域体系として捉え、地域体系という概念を具体的に明確化していく出発点とするために、2005年10月15日に高知大学で開催された日本熱帯農業学会第96回講演会での発表⁽⁴⁾に基づいて「資料整理と覚書」として執筆された報告書⁽⁵⁾を加筆修正し、上記プロジェクトの今後の展開を促進する議論の材料を提出するためにとりまとめた。

2. 西南シルクロード

古代のヨーロッパと中国を結んだシルクロードには二つの存在が知られている。天山山脈地域を通る西北シルクロードと、ヒマラヤ何面をトラバースする西南シルクロードである（図2）。成都から雲南・ミャンマーを経てインドに入る西南シ

ルクロードは「蜀身毒古道」（図3）と中国では呼ばれている。史記の大宛伝に記されている、前漢武帝によって大月氏国に派遣された張騫（ちょうけん）の報告に知られるように、西南シルクロードは、玄奘のたどった北西シルクロードがひらかれる以前より存在していたといわれている。杉本正年氏によれば、蜀とは四川、身毒はインドを指している。以下、同氏の著作からの引用である⁽⁶⁾。

すでにこのことからみても（「史記」大宛伝を指す：安藤注）、前漢のはじめから、蜀の商人たちは「蜀綿」や竹製品をインドに運んでいた。そのルートはもう一つのシルクロード「蜀身毒古道」であり、インドからさらにペルシャやローマにまで運ばれていた。したがって、「西南シルクロード」は「西北シルクロード」よりもその歴史ははるかに古い。この「西南シルクロード」は、成都から巴州にでて金沙江（長江）を遡行し、大理付近から古代ビルマの滇（てん）国に入り、インドのアッサム州に貫通するルートで、その交通手段は主として馬と船であった。このルートはまさに照葉樹林帯の中心部を通ず

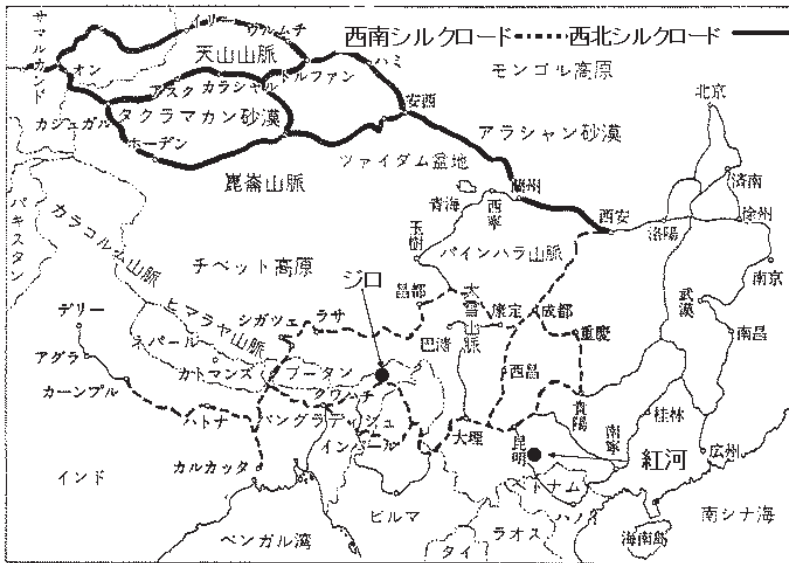


図2 二つのシルクロードとジロ、紅河の位置（出所：杉本正年『日本基層文化の整理学』文化出版1987：173の図65に加筆）

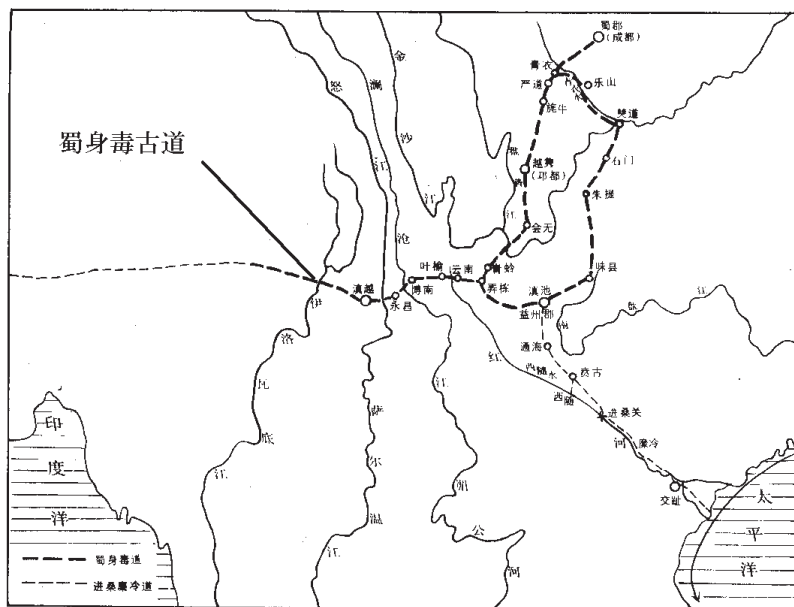


図3 先秦から漢晋時代までの雲南の対外交通の主要古道（出所：陸 鞞『雲南対外交通史』雲南民族出版社 1997）

る「照葉樹林街道」でもあった。この地帯は旧石器時代の南アジア諸語族の原郷であり、氷河時代のアジア大陸を南下してきたモンゴロイド系人種との混血したチベット＝ビルマ語族の生活圏でもあった。彼らは新石器時代に入ってからも狩猟・採集の生活を続けていたが獲物を追う行動路としてひらかれた。しかし、このルートが中国とインドを結ぶ交易路に発達したのは、アリア人がインド亜大陸の北東部に進出したBC1000年ごろからであろう。

蜀身毒古道は、唐の南詔大理時代には他の古道とネットワークができインド－中国を結ぶ主要な交易ルートとなっていた（図4）。杉本正年氏が指摘するように、現在、チベット＝ビルマ語群諸民族は、あたかも古道を使って移動して来たかのように古道のネットワーク沿いに分布している（図1～4を比較参照のこと）。蜀身毒古道は、トラバースルートの幹線道だったのだろう。雲南経由でインドと中国を結ぶトラバースルートとしての交易道は、明代には閉ざされる。交易道の消滅

は、2006年に京大東南アジア研究所の客員教授であった四川大学の羅二虎氏によれば、明の鎖国政策が強く影響しているという。

西南シルクロードを利用しアッサム、ミャンマー、雲南を移動したのは、チベット＝ビルマ語群諸民族以外には、アッサムに王国を建国したアホム族が知られている。アホム族のルーツは、カム・タイ語群のタイ系民族のシャン族である。ミャンマーの北部のマウルング（Maulung）に生まれたアホム王国の建国者であるスカパ（Sukapha）が兄弟との争いの後、新天地をもとめて、1215年に移動を開始した。1228年にブラマプトラ河谷に到着し、1253年にチャライデオ（Charaideo）に新天地を定めた(7)。13世紀初頭にはアッサム州北部のブラマプトラ河谷の東端に侵入したシャン族のグループは、19世紀までアホム王国を維持するのである。18～19世紀にはビルマ軍はモニプリヤアホムへ侵入を繰り返す、第2次世界大戦のインパール戦争では、南西シルクロードと考えられている道の一つを通り日本軍がミャン

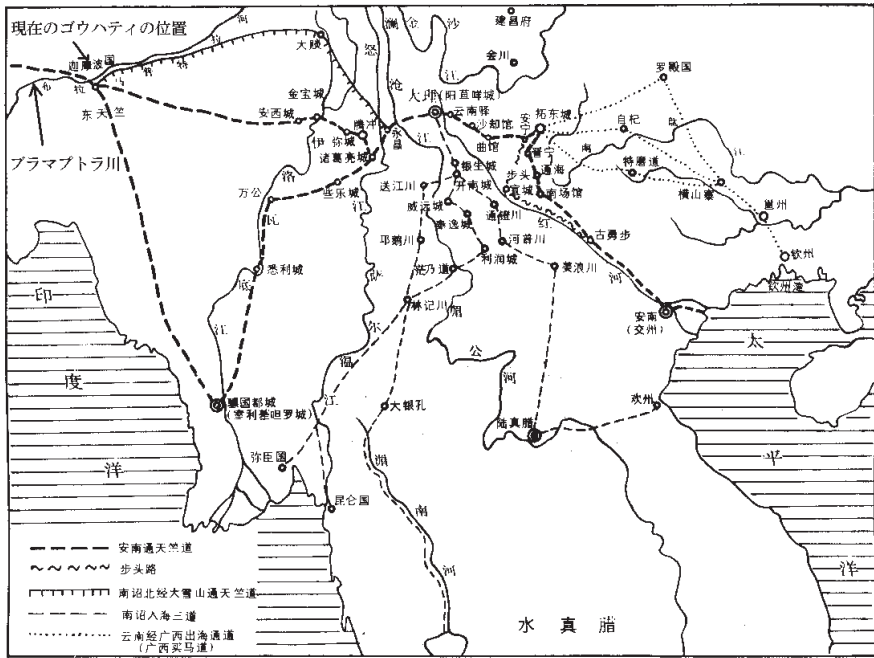


図4 南詔大理時代の雲南の対外交通の主要古道（出所：陸 朝『雲南対外交通史』雲南民族出版社 1997）

マー領のタムーからモニプリ州の州都のインパールに向けて、陸路、軍を進めている。

3. ハニ族と棚田稲作

(1) ハニ族の起源と棚田

『中国少数民族事典』はハニ族を以下のように説明している⁽²⁾。

ハニ族は、総人口が143万9673人（2000年）で、ベトナムのトンキン湾に流れ込むソンコイ（紅河ホンハー）川と、瀾滄（ランツァン）川（メコン川のこと：安藤注）の間の哀牢山脈や無量山一帯の山間部に住居する。行政的にいえば、雲南省紅河ハニ族自治州の紅河、元陽、緑春の各県などが中心となる。＜中略＞

ハニ族の祖先は詳細が不明であるが、漢王時代に雲南省の南部を流れるルー江流域に分布していた叟（そう）人の和という集団であろうと推定されている。＜中略＞

ハニ族が居住している地域は亜熱帯性の湿潤気候に属し、かつては焼畑耕作でトウモロコシやマメ類を栽培したが、現在では山腹に造成した棚田での天水による水稲稲作や茶栽培を行っている。水稲耕作に関しては、この地に定着してから、タイ族からその技術と導入したといわれている。主食は精米した状態でも赤色をした赤ゴメで、二回炊きを行う。

ハニ族と棚田の歴史について、張 宏臻氏は、論文の中で下記のように記している⁽³⁾。

ハニ族は古くから棚田農耕民族である。中国の最も古い史書『尚書』の記載によると、2300年余り前の春秋戦国時代からも、ハニ族の先住民「和夷」は、居住地である「黒水」（今の四川省大渡河、雅砻江、安寧河流域）ですでに棚田を開墾し、稲作を始めた。

本書『禹貢』篇によると「和夷」が住んでい

る場所は「厥土青黎」（土は真っ黒で、質は肥沃である）で「厥賦下中三錯」（比較的好く貢納されている棚田）とある。「厥賦下中三錯」は中国歴史書のハニ族棚田農耕についての最初の記載である。漢代の司馬遷『史記・西夷列伝』、西漢時代の雲南少数民族「西南夷」でも、比較的技術の進んでいるのは「耕田、有邑聚」（稲作農耕、村落あり）で、ハニ族がそこに含まれていることが記載されている。

唐代になると、ハニ族は紅河南岸の哀牢山地域にすんでおり、唐代・樊綽の『蛮書・雲南省内特産』に「蛮治山田」（山田を耕す）、殊為精好（技術が優れている）と記述されており、1200年前のハニ族の棚田農耕は、相当な水準に達していることが証明されている。

明の初期になると、農地面積を拡大する「和泥」（ハニ族歴史的称呼）首領、例えば左能呉蛙頗（ごはんは）、納更龍咀等に士官と職位を与え、開墾された土地を世襲できるようになった。呉蛙頗は、紅河県左能土司の祖となり、左能山を開墾した功績が認められ、政府から「長官司、世襲」を授けられた（嘉慶『臨安府志』第18「土司」）。龍咀は元陽県納更土巡檢、即ち、現在の当県上新城村の役職である。雍正『雲南通志』第24『土司伝中・納更山巡檢』には、「明洪武中、龍咀以開荒有功、給冠帶、管理地方、尋授土巡檢、伝子龍政……」と記録されている。これらは、皆ハニ族の頭領が人々を率いて哀牢山の棚田を開拓した記録である。

『雲南の少数民族』は、和夷（ホイ）は、中国の古代人羌につながると説明している⁹⁾。同書によれば、「哈尼族は哈尼（ハニ）、カ多（カトウ）、豪尼（ホニ）、碧約（ピーヨー）、布都（プトオ）、白宏（ポポ）を自称する七つの集団の人数が比較的多い。中国の史籍にみられる歴史的名称には、和夷（ホイ）、和蛮（ホマン）、和泥（ホニ）、窩泥（ウオニ）、阿泥（アニ）、哈尼（ハニ）がある。新中国成立後は哈尼族に呼び名が統一された」とある。和が和夷や和泥、和蛮をさしているかどうか、『中国少数民族事典』には明記されていず、羌（キョウ）と関係があるかどうかは不明である。

(2) アッサム・ブラマプトラ河谷でのチベット＝

ビルマ語群諸民族の出現

羌（キョウ）の存在が伝えられる紀元前7世紀、アッサム・ブラマプトラ河谷には、現在広く分布しているボド族やチュティア族と呼ばれるチベット＝ビルマ語群の祖先につながると考えられているキラータ（Kirāta）とよばれる民族が定着していたことが知られている。アッサム・ブラマプトラ河谷のもっとも古い定着民族はカシー族に代表されるオーストロアジア語族の言語を話す人々であったと推定されているが、チベット＝ビルマ語群の諸民族の祖先となる人々の定着は、先に述べたように、紀元前10世紀以前にはすでに起きていたといわれている。その後、アッサム・ブラマプトラ河谷へのアーリアンの流入が始まった。チベット＝ビルマ語群の諸民族の祖先の存在は紀元前6～7世紀のベータ文献に記録されているという⁹⁾。

1954年にゴウハティ大学の Banika Kakati 記念講演で、カルカッタ大学名誉教授 Suniti Kumar Chatterji 氏は、アッサム・ブラマプトラ河谷で後期ベータに記録されはじめるモンゴロイドとみなすことができるキラータについて、以下のように述べている¹⁰⁾。

The Kirāta or mongoloid people were certainly very well known to the Vedic Aryans, and we find mention of them in the *Yajur* and *Atharva Veda*. They appear to have started to come within the Hindu pale from the late Vedic period, and Bhagadatta with his Kirāta and Cina or Chinese hosts participated in the Mahābhārata battle as an ally of the Kauravas. He fought from an elephant, and was killed by Bhīma, the Pāṇḍava hero. All this would suggest that the king of Prāgiyotiṣa featured in the Mahābhārata in probably its first draft as an epic- so important is Bhagadatta. Traditions of Hindu ruling houses in Burma suggest the migration by land route through Assam into Burma among the Mons, the Pyus and Burmese even before the middle of the 1st millennium B.C.

上記から理解されるように、キラータ（Kirāta）の存在とともに、Suniti Kumar Chatterji 氏は、アッサムからビルマへの陸路による移住の道が

B.C.500年以前に遡れるのではと推論している。西南シルクロードの存在を考える上で、この点は示唆に富んでいる。前述したように、杉本正年氏の考えでも、西南シルクロードである照葉樹林街道へのチベット＝ビルマ語群諸民族の祖先の定着は紀元前10世紀頃以前に遡れることになる。すでに紀元前には西南シルクロードが確立されていたと考えることができよう。

以上から仮に紅河県へのハニ族の定着が紀元後に起きたものとしたとしても、羌（キョウ）以外にもボド族やチュティア族などのアッサム・ブラマプトラ河谷に定着していたチベット＝ビルマ語群諸民族の祖先と考えられるキラータから派生した諸民族の移動の可能性を否定することはできないだろう。ハニ族の各自称と、歴史的名称から、羌（キョウ）から分かれて発展したと考えることもできるが、すでにネパールやアッサムなどヒマラヤ周辺で分化を起していたハニ族の祖先となる民族が、トラバースルートにより紅河県の哀牢山地区に移住、定住することで文化的に融合し現在のハニ族を形成してきたとも考えられる。恐らく両者が起きていたことだろう。

哀牢山地区のハニ族に伝わる伝承では、「諾馬阿美（Noqmaaqqeimeil）」という地名の土地から移動してきたという伝承があるが⁽¹¹⁾、比定地は確かでないらしい。移動のルーツが明確でないのは、複数の民族がしだいに融合してハニ族が形成されたとみなせば納得がいく。

(3) 13世紀の西双版纳（シーサンパンナー）タイ族とアホムの稲作

棚田はハニ族の共通性をつくる一つの文化要素であると位置づけることもできる。唐代（618～907年）の雲南における「蛮治山田」と、明代（1368～1644年）の紅河県では棚田開拓が進んだという張宏臻氏が紹介している記録は、棚田が少なくとも歴史的に唐や明の時代までは遡れるということを示している。私がフィールド・ワークで訪れた紅河県甲寅郷甲寅村公所（村公所は日本の行政村に相当する単位、その下にいくつもの自然村がある）で建村年がわかっている甲寅村とその周辺の7ヶ村（これらは自然村である）の中でもっとも古いといわれている甲寅村が、1238年で、その後、16世紀に1つ、17世紀に3つ、18世紀

に3つの村が建村されている。このことから、13世紀には、棚田を生業とする村が紅河県甲寅郷でははっきりと形を現してくる⁽¹²⁾。

『中国少数民族事典』では、前述のように、ハニ族の稲作はタイ族から習ったという。この説にしたがえば、どのような稲作をハニ族は受け入れたのだろうか。クリスチャン・ダニエル氏は、ミャンマーのサルウィン川からイラワジ川間の地域の記録を伝える漢籍史料、19世紀の英領ビルマ史料と現地調査をもとに13～14世紀の雲南南部の西双版纳（シーサンパンナー）の稲作技術を具体的に考察している。長くなるが、重要な事実を指摘しているので、同氏の推論を要約する⁽¹³⁾。

西双版纳の住民は水田耕作（シャン語でhet na）と焼畑耕作（het hay）と区別し、異なった自然環境に対応する農耕技術として、基本的には異なった民族により、この二つの耕作が実施されている。水田耕作は、主にタイ系民族によって灌漑が可能な盆地平野や丘陵地帯の棚田で営まれるのに対し、焼畑耕作は山地で主に非タイ系（モン・クメール系及びチベット・ビルマ系）民族によって行なわれる。焼畑をするかどうかは、民族固有の文化ではなく、自然環境によって決定される部分が重要である。当該地域の伝統的焼畑農耕は陸稲を主食とし、綿花を衣料作物としている。13～16世紀の史料からは、焼畑耕作の特徴をよみとることは困難である。水田耕作については、唐代の南詔の地誌『蠻書』（樊綽著860～874年成書）では、象耕が記録されている。象耕は象による蹄耕と推定される。『百夷傳』（1396年頃の緬の百夷に関する記録、李思聰本）では、人力による鋤耕が次のように記録されている。「土地は、広く、河は平坦で、土壤は肥沃にして人口が多い。大きな村落があり、戸数は千や百にのぼる。だが、民は農業に勤勉ではない。牛耕を用いず、ただ婦人が鋤（かく）のみ。故に地の利を尽くすあたわず」。鋤は鋤ないしは鋤と考えることができる。焼畑は番刀を使っていた。タイ系民族が暮らす14世紀の盆地平野では、番刀と鋤による水稲作が行なわれていたようだ。『西南夷風土記』（1583～84年のタウングー朝討伐時の中国側の記録）

では、犁耕が以下のように記録されている「五穀ではただ稻のみを樹(う)えて、その他の穀物はあまり栽培しない。蠻莫(バモ)以南では、一年に二回の収穫があり、冬に種えて春に収め、夏に作り秋に成る。孟密(ムンミット)以北では、<漢族のように>犁を用いて耕して栽挿し、孟密以南では、泥に耙(まぐわ)をかけて撒種する。その農耕法はおこないやすいようである。思うにこれは土地が肥沃なためである。人家に近い田畑は<開墾し得る土地の>2~3割が開かれており、村寨からやや遠いところは全く荒れ野のままである」。この記事は、当時、サルウィン河以西からイラワジ河までの地域では、ムミットを境にして、二つの水田耕作技術地帯が形成されていたことを伝えている。犁耕と移植の卓越する北部地帯と、耙耕と散播の卓越する南部地帯に分けられる。また、この時に使われていた犁は撥土板を着装しない中国系枠型犁であったと思われる。犁がなぜ15世紀以降に伝来してきたかは謎である。9世紀において雲南西部では水牛二頭によるインド系の牽引法を使用する中国系枠型犁がすでに使用されていたことが、9世紀末の『中興二年(899年)図巻』(『南詔図巻』)にはこのような犁が図解されている。南詔・大理の両時代における、雲南と当該地域との密接な政治的関係を考慮すれば、犁は15世紀よりはるか早期に伝来したとしても不思議ではないが、とにかく『百夷傳』にあるように、当該地域では14世紀末まで鋤耕が卓越していた。インド系の耙の受容を実証する史料はなく、全くの推測に過ぎないが、当該地域におけるインド系犁の伝播は16世紀後半になっても確認できない点が興味深い。東南アジア大陸部においては、中国系の犁耕法の存在が比較的強くみられるが、その古層にはインド系の犁耕法の流れがあるとされている。当該地域ではそのような現象は史料から確認できず、むしろ古層といえ、それは原初の稲作技術やマレー型稲作に属する鋤耕法、ひいては焼畑農耕だといわざるを得ない。

以上のクリスチャン・ダニエル氏の推論は、アホム族の農耕技術を考える上で重要な特徴を指摘している。13世紀初頭に、アホム族となるシャ

ン族の一グループがミャンマー北部から移動を開始したことはすでに述べたとおりである。二つをつなぎ合わせると、シャン族の水田耕作には、13世紀には犁を使った牛耕ではなく、鋤と呼ばれる鋤もしくは鋤をつかった鋤耕を行っていたということになる。シャン族であるアホム族は、犁をもたずにアッサム・ブラプトラ河谷に入ってきたという作業仮説が成立する。

ミャンマーのアラカン(現在のラカインに相当する)の歴史によれば、アッサム・ブラプトラ河谷への侵入以前の976年に、シャン族の王子がラカインに侵入し、18年間占領した。その後バガンの王の侵入を受けた記録が、英領時代に編纂されたラカイン州の首府が置かれていたアキャブ県の地誌に記されている⁽¹⁴⁾。現在、ラカインでは2頭の牛に牽引されたテ(Te)と呼ばれる中国系枠型犁であるビルマ犁(写真1)が多く使われている。しかし、北部のシットウエー(旧アキャブ県に位置する現在の首府)の近郊では現在でも、南部地方でも最近にいたるまで2頭の牛に牽引させたアット(At)(写真2)とよばれるインド犁と類別できるベンガル犁が使われていたことを私は現地調査で確認している⁽¹⁵⁾。また、アッサム州のアホム王国の里であるシブサガールのアホムの村を2003年2月に訪問し、ジョルハットのアッサム農業大学の農業機械学科で現地の犁型について専門家に確認し得たことは、伝統的には、アッサムでは中国枠型犁ではなくインド犁、すなわちベンガル犁が2頭の牛に牽引されて使用されていたことである。現在、小さな撥土板をもつビルマ犁の犁先とよく似た形の犁先がベンガル犁の犁身に犁先として使われている。しかし、私が話しを聞くことができた20名以上のアッサムの農民のうち一人の農民は昔からあったといていたが、他の農民は、最近(15年から20年以内)に使われるようになったという答えだった。アホム王国があったアッサム北部やラカインの北部は、シャン族や、それ以降につづくビルマ族の侵入を受けたにもかかわらず、過去にはインド系犁であるベンガル犁の利用が主流であったことが推察される。近年導入が進んだ雲南やミャンマーでの枠型犁(ビルマ犁)の犁先が鑄鉄製であるのに対して、北部ラカインやアッサムの同型の犁先は鍛鉄製で



写真1 ビルマ犁Te



写真2 ベンガル犁At

ある。中国、日本、朝鮮半島では犁先は基本的に鑄造であることが知られている⁽¹⁶⁾。1992年の12月に渡部武氏が調査を行った雲南の西双版纳の焼畑を主な生業としている景洪県曼冬村（ハニ族）でも常畑と棚田が増加し、中国系杵型犁が使われていることを報告し、犁先を土の鑄型で巡回してくる鉄匠（鍛冶屋）がつくっていることを写真入りで記録している⁽¹⁷⁾。鉄の鑄造技術はヨーロッパでは紀元14世紀頃からであることに比べ、中国では戦国時代（紀元前476～紀元前221年）にはじまったといわれている⁽¹⁸⁾。鑄鉄の犁先がアッサムやアラカンに入っていないということは、中国の野鍛冶レベルでの鉄の鑄造技術が定着していないことを示している。シャン族が10世紀、13世紀に中国系杵型犁を持ち込んでいないという点に加え、その後も、アッサムやラカインでは中国系杵型犁（ビルマ犁）が入る以前に、鍛造の犁先をもつインド系犁（ベンガル犁）が定着していた

ので、鑄造技術が定着する必要がなかったのだろう。

犁の起源地はインド西北部からアフガニスタン、中央アジアと考えられている⁽¹⁹⁾。畑作農業で生まれた犁は、インドや中国で稲の水田作に利用されるようになる。しかし、馬や牛に引かせる犁を使わない、水牛による蹄耕や、鋤による人力の耕起、耙（まぐわ）のみによる水田の本田準備は、決して珍しくなく、私が知る限りでも、沖縄やインドネシア、ミャンマー、紅河県のハニ族、インドのアルナチャール・プラデーシュのアパタニ族で行なわれてきた。古島敏雄氏は、江戸時代の資料によればと断り、「家畜を飼育し、馬耙をひかせて代掻をしながら、犁耕をしない地方は少なくない。牛馬にひかせるのは略々全国的であるが、犁耕の行なわれない地方はすくなくない」と説明している⁽²⁰⁾。また、河野通明氏は1990年5月時点での確認と断り、奈良時代をふくめそれ以前の遺跡からは、犁の出土数に対して、遺跡数で5倍、個体数で7倍の馬鋤（まぐわ、耙に同じ）の出土数であるという。特に、古い時代の出土例では、犁よりも馬鋤の方がはるかに多い、と指摘している⁽²¹⁾。畑作に比較し、水田作では犁は必ずしも重要な農具ではないのである⁽⁴⁾。

以上を要約すると、13～14世紀、ハニ族が稲作を習ったといわれる雲南南部に住んでいたタイ族（シャン族）は、現在にみられるような中国系杵型犁を使った犁耕と耙による本田準備をする稲作を行っていなかった。犁をもたない、鋤を使ったシンプルな焼畑の水田稲作であった。漢籍史料から、クリスチャン・ダニエル氏は、雲南南部の13～14世紀のタイ族（シャン族）の稲作を原初的稲作技術やマレー型稲作に属する鋤耕法、焼畑農耕であると結論づけている。焼畑的水田稲作であれば、ハニ族は紅河県の哀牢山脈に移住してくる以前より焼畑と焼畑的水田稲作を知っていたと考えてもなんら無理はない。紅河県のハニ族は、タイ族から稲作を導入したというよりは、焼畑的水田稲作の積極的な適応を行った結果が現在の棚田文化を築いたと私は考えている。

(4) 焼畑的水田適地としての紅河県哀牢山脈を求

めたハニ族

13～14世紀、当時、アッサム・ブラマプトラ河谷の丘陵であるアルナチャール・プラデーシュ州には、現在でもそうであるように焼畑を行える丘陵は十分あったことだろう。また、当時ハニ族が焼畑を主な生業としていたら、何故、紅河県で焼畑を現在ほとんどおこなっていないのだろうか。不思議である。

一般に棚田は人口増加にともない焼畑から常畑が起り、田植えによる常畑の水田化が始まったと考えられている⁽²²⁾。しかし、私の調査結果によれば⁽¹²⁾、紅河県甲寅郷では、棚田が焼畑の常畑化から発展したという話を聞くことはできなかった。文献的にもこのことを確認できていない。村人たちによれば、梯地と呼ばれる段畑と梯田とよばれる棚田の面積は、1970年代の「農業を大寨に学べ」の時代に標高2000m以上で段畑が造成された以外は、それ以前と大差はないということである。

標高1300～2000m、推定傾斜1/3～1/5の山腹にかけて棚田が分布している甲寅郷の甲寅村や娘吉村での農民に「なぜ焼畑はしないのですか」と問うと「このあたりじゃ、土地が急すぎて焼畑はできない。だから梯田(棚田)や梯地(段畑)が多くなったのだ」と答えてくれた。甲寅郷では6～9月に年平均降水量1310mmの7割が降る。降雨パターンは熱帯モンスーン気候である。熱帯モンスーン気候下の傾斜地農業では雨季の耕地の土壌流失の防止と肥沃度の維持が問われつづけている。傾斜1/3～1/5という急傾斜地での焼畑は、作業の困難さと、雨による土壌流失を起すことを容易に想像できる。紅河県甲寅郷の山腹は焼畑適地ではないようだ。棚田が新しく大々的に造成されたという話は聞いておらず、棚田は相当に古い時代に造成されたようである⁽¹²⁾。10～13世紀、紅河県意外には、まだまだ焼畑適地となる山腹が雲南に十分にあったことだろう。前述の西双版纳の山はなだらかで焼畑の適地である。渡部武氏が調べた景洪県曼冬村のハニ族はつい最近まで焼畑を主な生業としていたことから分かるように、一部のハニ族は、焼畑適地を選択し定着した。紅河県甲寅郷のハニ族は、棚田適地を選択した、と考えた方が自然である。焼畑の稲作を応用した棚田技術によって、村々を拓いていったのであろう。

紅河から昆明へは石屏の街経由のバスがある。石屏県は紅河県の北隣の県で、石屏は県の中心の街である。石屏に入る手前の小さな谷沿いに住む服装や屋敷がすっかり漢民族化したタイ族のつくっている棚田を私は実際に観察することができた。ここのタイ族の棚田は川の谷筋の山の斜面に拓かれていて、石積みの畦をもち、冬には水を棚田から抜いていた。紅河県甲寅郷ハニ族は比較的尾根沿いに棚田をつくっている。畦は土で、収穫後に鋤で起こした後、水を田に引き込み、冬中水を張りつづける。甲寅郷では水で棚田を耕すようなことをする。石屏の街の手前の谷のタイ族の棚田は、中国系犁型で耕す。同じ棚田といえどもタイ族とハニ族では棚田の立地条件とそれを背景とした棚田造成と棚田維持管理などに大きな違いがある。これは基層となった焼畑の水田稲作の違いが影響しているからなのだろう。盆地と川筋を居住地として好むといわれるタイ族と山住みを好むハニ族では、水田立地などの稲作技術が焼畑的水田稲作においても異なっていた。13～14世紀、紅河県に棚田を拓き、村を紅河県につくりはじめたハニ族は、焼畑以上に焼畑の水田稲作に慣れたチベット＝ビルマ語群の民族であったようだ。

4. アパタニ族の棚田の作付体系:無犁稲作と畦のシコクビエ移植栽培

『中国少数民族事典』によれば、2000年現在、雲南の少数民族は56に分類され、チベット＝ビルマ語群の民族は17と記述されている。1984～87年に雲南省焼畑を調査した尹紹亭氏は、著書『雲南の焼畑』中で、この56の民族のうち14民族を焼畑民族としてあげている⁽²³⁾。そのうち、チベット＝ビルマ語群は、ハニ族を含めて9民族、ミャオ＝ヤオ語群が2民族、モン・クメール語群が3民族である。同じハニ族といえ、紅河県のハニ族は現在ほとんど焼畑をおこなわず、棚田での稲作を主な生業にしている特色のある焼畑を生業としていたチベット＝ビルマ語群の民族と、指摘できるかもしれない。

焼畑を主な生業としてきたチベット＝ビルマ語群の民族は、雲南以外にも南西シルクロード沿いの、モンスーン気候が雨季に十分に雨を運ぶネパール東部から、インドのアッサム、アルナチャール・プラデーシュ州に分布している。これらの少

数民族の中でも、アパタニ族は、紅河県のハニ族のように、焼畑的水田稲作を生業としている民族である。アッサムのブラマプトラ川に流れ込むスバンシリ（Subansiri）川流域のアルナチャール・ブラデーシュ州ロアー・スバンシリ県のジロの街があるスバンシリ川の支流ケレ（Kele）川がつくる広い谷底平野に集中して住んでいる。アパタニ族は、アディ（Adi）族、ニシ（Nishi）族、ヒル・ミリ（Hill Miri）族とともに、アボタニ（Abotani）を祖先とするアボタニ伝説を共有するチベット＝ビルマ語群のタニ（Tani）グループをつくっている⁽²⁴⁾。タニ・グループの諸民族は、アパタニ族以外は棚田もつくるが焼畑が生業である。恐らく、アパタニ族ももともとは焼畑を行っていたと考えられる。ジロのアパタニ族を私は調査する機会を得たので、以下、アパタニ族の焼畑的水田稲作の実際について紹介してみたい⁽⁴⁾。

(1) アパタニ族と調査について

2005年2月17日～26日に安藤と河合明宣氏が、2005年8月6日～14日に安藤が、インド、アルナチャール・ブラデーシュ州ロアー・スバンシリ県に位置する通称アパタニ谷のアパタニ族が暮らす村々を訪れることができた。アパタニ谷は、19世紀末まで、外部に知れることがなかった。本格的な調査は、英領インド政府の要請を受けて1944・45年に当地に入った人類学者C. F. ハイメンドルフ（C. F. Haimendorf）氏を待たなくてはならなかった。独立後もインド政府方針により、当地は近年まで外に閉ざされてきた。自国民であっても同州へ入るためには、州政府より入域許可書を取得し州境で検問を受けなければならない。民族学的調査がインド政府主導で行われてきたが、農業技術の実態調査は看過されてきた。無犁水田稲作と水田畦へのシコクビエの移植栽培はハイメンドルフ報告の引用によりすでに日本でも紹介されているが、本報告では、その実態を予備的調査結果として報告する。アッサム州のゴウハティ（Guwahati）大学、アルナチャール（Alnchal）大学の地理学科の協力により調査は実施された。

(2) 調査結果

(i) 気象・地形・集落・民族

県の地形は山岳地帯で、集落はほぼ1000m～

1600mに位置している。カラマ（Kalama）川をはじめ多くの支流がブラマプトラ川に流れ込んでいる。12、1月の平均最低気温は5-10度、日平均気温は15度、最低が0度以下になることも珍しくない。高温期の7月、8月の平均最高気温は30度となる。入手できた1990年の降雨量は、県庁所在地の街ジロで年降水量1800mm、11～1月はほとんど降雨をみないが、2、6、7月には200～400mmであった。同県に在住する主な民族は、前述したようにチベット＝ビルマ語群の言語をもち、モンゴロイド系であると言われているニシ族、アパタニ族、ヒル・ミリ族である。1991年の県人口は83167人、人口密度は平方キロメートル当たり8人である。アパタニ谷に地置するジロの街の標高は1564mである。周囲は低山で囲まれている。アパタニ族はこの谷にのみ集中し、谷底平野には水田が拓かれ、山の裾野に集落が点在している。水田は、低い畦の棚田状となり、谷の中心を流れるケレ（Kele）川に注ぐ谷筋から灌漑水を引き、畦越し灌漑と水路灌漑が併用して行われている。

(ii) 作物栽培概況県の作物栽培報告

表1によれば、地形と人口密度から推測されるように、同県では、水田作と同様、焼畑が重要な作物生産を担っているが、アパタニ族の村々では、伝統的にも、現在でも、焼畑はほとんど行われていない。アジ（Aji）（水田）での稲作が卓越し、水田の景観の中に柵囲いされた一辺が5～10mの四角いヨル（Yolu）（畑）で野菜がつくられている。シコクビエなど雑穀は、周辺の諸民族では焼畑で栽培されるが、アパタニ族は、限られた畑と一面の水田の畦で主に栽培している。

(iii) 水田の作付パターンと養魚

表2に示したように水田は4分類され、それらに応じて作付パターンがほぼ選択されている。ジェビ（Jebi）：灌漑水源に近く植付け棒（ケドゥKedu）をつかわずに手植えできる泥状の田。アネ（Anne）：水源に遠く掘棒をつかつての手植が必要になることもある固い田。ディテル（Diter）：鋤（ディベDipe）による耕起が必要。ティムベ（Timpe）：水が引けない田。ハリ（Hari）村の水田の5割がジェビである。ジェビでは、2月に有害雑草を手取りし、平鋤ディベで表土を剥がして

表1 Lower Supanburi 県作物統計 (03年乾季作—04年雨季作)

単位：面積 ha、生産 mt

作物名	灌漑耕地		非灌漑耕地		焼畑		高収量品種栽培耕地		合計	
	面積	生産	面積	生産	面積	生産	面積	生産	面積	生産
イネ	5000	9000	1110	780	2996	1130	200	500	9306	11410
トウモロコシ	0	0	220	402	1350	1554	26	65	1596	2021
シコクビエ他	0	0	511	830	2100	2554	0	0	2611	3384
タニス	0	0	100	115	130	156	50	110	280	421
クスルアス	0	0	95	150	160	186	45	104	300	440
キマメ	0	0	60	95	120	130	20	46	200	271
エンドウ	0	0	40	64	10	11	50	104	100	179
他	0	0	260	355	300	240	400	670	960	1265
ヒマワリ	0	0	30	42	15	10	10	14	55	66
ラッカセイ	0	0	85	100	25	20	30	42	140	162
野菜	0	0	310	340	27	32	2000	4950	2337	5422
ジャガ	0	0	169	1490	10	34	100	1350	279	2874
イモ	0	0	70	1296	12	108	0	0	82	1404
サトウキビ	0	0	15	108	5	25	50	400	70	533
ショウガ	0	0	65	115	59	71	30	66	154	252

注：1) 県の統計書の表題は「2004年12月31日現在における栽培面積と生産量報告書—カリフ(雨季作)—」となっていたが、乾季作物も含まれているので03年乾季作から04年雨季作とした。2) 報告書では、灌漑耕地、非灌漑耕地、焼畑(Jhum)と高収量品種栽培耕地(HYV)に分類されている。灌漑、非灌漑、焼畑では、在来品種が栽培されているとみなされる。高収量品種においてイネについては灌漑耕地とみなせる。3) 報告書では、シコクビエ他は Millet、エンドウ他は Pea、野菜は Vegetables と表記されている。出所：Lower Supanburi 県農業局

表2 Apatani 谷 (Hari 村) の水田 (Aji) 分類別作付パターンと水田養魚

水田 類別	稲の 種類	月												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
Jebi	晩生		△◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◇○
Anne	早生		△◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◇○
Diter	早生		△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◇○
Timpe	雑穀(注1)		△	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
養魚			▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽

注：1) Timpe では、主に雑穀のシコクビエを移植栽培する。稲苗が余った時などは、稲作が行われる。雨水のみによる栽培となる。2) 稲は水苗代で、雑穀のシコクビエは陸苗代で苗が栽培されている。3) 稲は在来種は早生(Mipya)と晩生(Emmo)に分類されている。気温の関係などで Hari 村が立地する Apatani 谷では高収量の新品種は栽培されていない。4) 記号：△(本田耕起) ◆(灌漑) ◇(排水) ●(移植) ○(刈取) ▼(稚魚を入れる) …(湛水) 出所：筆者らのフィールド・ワーク(安藤・河合 2005年8月、安藤 2005年8月)による。

除草し（写真3）、畦の修復と畦塗りを丹念に行った後に水がためられ、4月に田植えを迎える。水田養魚は1967年に政府により実験的に開始された。1982年にジロに養魚場（Fishery Farm）が政府によって設立され、現在、農家は稚魚をここから主に購入している。2002-3年の県の洪水被害作物統計では、同県水田6割で養殖が行われている。水田畦の両端にはシコクビエがティムペ（Timpe）と同じように移植栽培されている。

(iv) 焼畑的水田稲作としてのアパタニ族の稲作

図5に示されているように、アパタニ谷のまわりは、ニシ族（図5では旧名の Dafla）やヒル・ミリ族（図5では旧名の Miri）に囲まれている。伝説によれば、アパタニ族はニシ族やヒル・ミリ族から遅れ移住してきた。アパタニ族には焼畑適地は多くは残されておらず、湿地での稲作を行なう必要があった、と考えることもできる。しかし、現在でも焼畑敵地とみなせる丘陵地には、Blue Pine (*Pinus wallichiana*) を中心に植林されている。アパタニ族が焼畑をしていない理由はさらに調査する必要があると言えよう。農具（写真4）は焼畑の作業と変わるものはない。栽培方法と農具から明らかのように、アパタニ族の水田稲作は平坦地の湿地水田稲作が山に上がったものではなく焼畑の技術が直接に適用されているとみなせる。残念ながら、ニシ族、ヒル・ミリ族の棚田と焼畑で栽培されている稲の品種について調べていないので、同一の品種を使っているかどうかは今のところ私は把握していない。ただし、ハリ村の古老は、

ニシ族から稲の種粉が入ったと類推している。後述するアパタニ族の稲作起源伝説とも関係し、稲の種粉がニシ族から入ったという古老の推論は大変興味深い。

シコクビエは酒つくりにはかかせない。畑であるヨルでも移植栽培されるが、私が2005年8月の調査で確認できたのは3筆の畑だけであった。一面の畦で栽培されていた。畦の真ん中を人が歩けるように空け、両端に一条ずつ植えられている（写真5）。畦は、水を貯める目的と同時に、焼畑で栽培することのできない、シコクビエを栽培する「畑」であるようだ。前述したように、水田稲作にとって、犁はかならずしも必要でない。C. F. ハイメンドルフ氏により新石器時代の農耕と紹介されたアパタニ谷の無犁稲作⁽²⁵⁾は、水田立地環境に適応した稲作であり、水田養魚との複合化で生産力の向上と自然環境との調和を達成している。この周辺地域の焼畑では、稲は種粉を掘棒で点播されるが、アパタニ族の畦での栽培と同じように、シコクビエは移植される地域がある（図6）。



写真3 アパタニ族の女性が2005. 02. 20の水田での表面を薄くはいでの除草作業

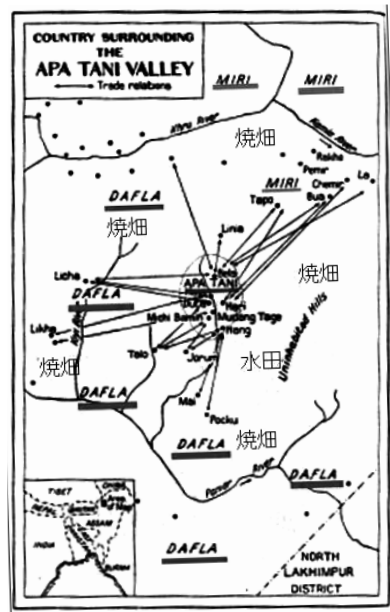


図5 アパタニ谷の地形と土地利用、諸民族（Haimendorf. C. F., *The Apatanis and Their Neighbours*, Routledge & Kegan Paul Ltd., 1962の図に加筆）



写真4アパタニ族の水田耕作用道具



写真5 ハリ村での水田の畦に移植されたシコクビエ (2005. 08. 08)

シコクビエの移植栽培



図6 ジロ (Ziro) と聞き取りで確認できたシコクビエ移植地域 (出所: 筆者のフィールドワーク)

このことは、焼畑から常畑そして棚田という発展から、焼畑から棚田への直接的発展が起こりえたことを十分に示唆している。京都大学大学院アジア・アフリカ研究科の院生で元陽県のハニの村で1年を越えてフィールド・ワークを行った安達真平氏は、雲南でも棚田でのシコクビエの移植栽培をしていることを、観察日の写真を添えて以下報告してくれた (2006年1月11日付けのメールでのパーソナル・コミュニケーションによる。未発表)

2004年5月22日、元陽県サラト郷サンラオチン村標高約1700m地点。干田の畦に移植されたばかりのシコクビエ (イ語はアヴィ) の苗。トウモロコシ畑で苗を育て、干田の畦に移植します。なかにはトウモロコシ畑に移植する人もいます。田の畦に植えると稲の生育に悪いからだとか。村の人への聞き取りでは、移植は6月初め、収穫は10月 (播種時期は聞くの忘れた) (写真6)。

2002年9月12日、元陽県サラト郷サンラオチン村標高約1750m地点。干田の畦に植えら



写真6元陽県サラト郷サンラオチン村でのシコクビエの苗の棚田の畦への移植。2004. 5.22. 撮影: 安達真平氏

れたシコクビエ（写真省略）。

2004年10月18日、雲南省西盟県旧県城下の斜面の棚田の畦に植えられたシコクビエ（雲南漢語は小紅谷）。この斜面には、上のほうにラフ族、下はワ族が棚田を開いて暮らしています。この写真（写真略）はワ族の田。シコクビエはワ族の常畑にも多く植えられており、主に酒にするそうです。

安達真平氏の観察しているワ族はオーストロ＝アジア語族、イ族・ラフ族はチベット＝ビルマ語群の民族である。私自身は、1999年9月の甲寅郷で標高1300mあたりに建設されていた1～2mの幅のコンクリート壁で作られた用水路に沿った歩幅ほどの広い畦の小路の両脇に穂をつけたシコクビエが育っているのを見ている。ただし、移植なのか直播なのか、用途については確認していない。紅河県の隣である元陽県や南部の西盟県でシコクビエを移植栽培が確認されている。紅河県や元陽県などが位置する哀牢山脈の他地域でもシコクビエは栽培されていることだろう。前掲の尹紹亭氏の『雲南の焼畑』で報告されている焼畑のシコクビエの栽培方法は播種と記されている。移植には言及がない。移植と直播の問題は今後丹念に事例を探っていくことが必要となる。繰り返すが、紅河県甲寅郷のハニ族の棚田耕作のもっとも大きな特徴は犁をほとんど利用しないことである。鋤で耕し、かりてきた水牛1頭に耙をひかせて代掻きを行うことが多い⁽¹²⁾。犁を用いない理由については、農民に繰り返し尋ねても、合理的で私自身が納得できる答えが得られなかった。今後の課

題である。

とはいえアパタニ族の稲作と畦におけるシコクビエ移植栽培から類推すると、雲南の棚田農業は、平坦地の犁耕稲作が山にあがったものではなく、焼畑から独自に展開していった焼畑的水田稲作としての棚田稲作であるようだ。

5. アパタニ族とハニ族の稲起源伝説

伝説ではアパタニ族の稲作起源は、犬が種籾を盗んできたことに始まるといわれている。以下、その伝説の抜粋である。

According to another Apatani mythological story, Goddess Dilayang Dibbu, the sister of Dilyang Tamang, was married to Abotani. She brought a lot of wealth along with rice and millet. But she was instigated by Goddess Tinii Rungya, which ultimately resulted in the divorce of Goddess Dilyang Dibbu from Abotani. She took back all her wealth and rice and went to her brother, Dilyang Tamang and then Goddess Tinii Rungya married to Abotani but she was worthless for him. Therefore, Abotani sent his dog to steal the rice of Dilyang Dibbu, when she was drying the rice under the sun. Accordingly, the dog stole a little bit of rice hiding it in its ears. Therefore, Apatani never beat dog during the harvesting periods as an honour to its services rendered at that Critical juncture⁽²⁶⁾.

稲作の起源に犬が絡んでくるのは、ニシ族にも伝わっている⁽²⁷⁾。作物の起源伝説に犬が絡んでくるのは、アパタニ族やニシ族ばかりでない。雲南省の元陽のハニ族にも伝わっている。以下、ハニ族の稲作起源伝説の抜粋である（原文は中国語。和訳は安達真平氏による）⁽²⁸⁾。

犬

ハニ族は犬を大切に扱う。これはただ単に犬が人間に対して忠実な伴侶であり、山に行くと狩猟したり家で留守番させたりするのに不可欠であり、人間の生産生活中において重要な役割を持っているからだけではなく、ハニ族の伝統的な思想や宗教観念の中で、犬が棚田農業に対

して大きな貢献をしたからである。

伝説によると、洪水による凶作の年に、大水が引いた後に、大地は荒れて人煙も無く、世の中の全ての種子が洪水で流されてしまった。一羽の小鳥が水辺から一本の金色の稲穂を拾って来た。まさに小鳥がそれを食べようとしたときに、木の下にいた一匹の犬がそれを見つけ、ワンワンと吠えたので、小鳥は突然の犬の泣き声に驚いて嘴を開き、稲穂を地面に落としてしまった。犬は稲穂を拾って人間に与えた。これ以来、人は再び稲を持つようになった。もう一つの伝説は、このようである。はるか昔、人間はまだ田を開き、種を植えることを知らず、世の中にまだ五穀の種子もなかった。五穀の種は天神、momi【モミ】が管理していた。五穀の種がなく、世の中の人たちはなんと生活が苦しいことか。人々は食べる穀物がなく、ただ野生の果実を摘んで食べることが精一杯だった。ハニ族の生活はとても悲惨だった。女神【天神の娘】は心の優しい女性だった。彼女はハニ族に同情し、父に相談して五穀の種をハニ族に送りたいと言った。しかし、父は同意しなかった。女神はハニ族を救済するために、こっそりと五穀の種子をハニ族に与え、同時にハニ族に稲の植え方を教えた。この事が父の天神に見つかり、天の掟に背いたとして女神は一匹の母犬に変えられ、人間界に落とされた。罰で犬に姿を変えられてから、人間と一緒に働くことは許されず、ただ家にいて留守番をするだけだった。ハニ族は天女の恩を忘れず、今の生活を手に入れることがなまやさしいことではない事を知っていた。ここにおいて、犬はすでに女神が化身したとして、神の地位を有し、稲作農業の創造者となった。棚田での稲作農業に従事するハニ族は自然と、犬の恩を忘れることはなく、愛情と尊敬の念を深めた。

ハニ族の犬に対する尊敬は、一年に一度の「新米節」という農業祭祀活動に集まる。新米節はハニ後で huoxizha (ホシザ、新しいご飯を食べるの意)あるいは cexizha (ツェシザ、新しい稲を食べるの意)、cexiabaduo (ツェシアバドゥオ、新しい米の酒を飲む)と呼ばれ、地方によっては嘗新節とも呼ぶ。「新米節」は普通、陰暦七月の龍の日に行く。ただし、哀牢山地の気候

は複雑で、各地で田植えの時期も様々で、稲の稔りも前後するため、祭りの期日も同じではない。ただ、おおまかには7、8月である。この頃はまさに収穫の秋で、山々の棚田の稲が金色に稔り、ハニ族が第一回目の稲の刈入れを行ない、新米を蒸して祭りを行う時期である。哀牢山地の大多数のハニ族はこの日、祖先を祭る品として甑一つの米を用意する。この米は古い米の上に、一層の新しい米を撒いて蒸したものであり、古い米を食べつくさないうちに新しい米が加えられたことを表し、衣祿【着るもの食べるものの意か?】が途絶えることなく、毎年たまってゆくという意味を表す。祖先への祭りを終えると家で宴会が催される。元陽一帯のハニ族では、皆で一緒に神へ捧げ物を送る活動が行われる。この時、各世帯は酒とおかずを用意し migu【ミグ、祭祀】の家に持ってくる。ミグは鶏を殺して神に捧げ、人を集めて楽しく酒を飲む。祭りの間、元陽一帯では、もち米でモチを作り、天(主に太陽、月、星)を祭り、太陽や月や星がいつまでもモチのように真っ白で人々を照らしてくれるように祈る。新米を食べる時には、人々は敬虔の情をいっぱいにして、主人が一碗のご飯をよそって先ず犬に食べさせる。これを「初物を先ず犬に食べさせる」と称して、人の犬への尊敬を表し、人間に五穀の種子を持ってきたことで犬の女神への人間の崇拜を表す。

ハニ族が新米節期間中に表す犬への尊敬と、祭りの期間中に祖先と天とを同時に祭ることは、ハニ族の原始宗教の観念の中で、犬が神聖な地位を占め、また棚田農業への崇拜と祭祀がすでに固く深く結びついていることを示している。(【】は安達氏の注)

大林太良氏は、中国の研究者が調べた事例により、稲などの作物の種子を「もたらした者は犬」である伝説をもつ中国の少数民族にチワン、パイ、トン、スイ、チベット、イ、リス、ラフ、チンポー、アチャン、ミャオ、トウチャ、コーラオ、プーランをあげている⁽²⁹⁾。伊藤清司氏は、「犬の穀物将来伝説は雲貴高原一帯ばかりではなく、その分布は湖南・広東・四川の各省、チベット族自治区などに及んでおり、伝承民族もひとり苗族にとどま

らない」と、犬の穀物栽培起源伝説が広範囲に存在していることを指摘している⁽³⁰⁾。どの民族に犬によって稲が伝えられたという伝説があるのかは詳しいことは分からないが、「焼畑・棚田（焼畑的水田稲作）・犬伝説」のセットは、アパタニ族とハニ族の深い関係を十分に示唆している。

6. おわりに—成果と課題：二つのチベット＝ビルマ・グループの適応戦略—

ヒマラヤ東部（アッサム、モニプリ、アルナチャール・プラデーシュ州など）は、1970年代以降、最近まで、外国人には閉ざされた地域であった。この地域に足を踏み入れ、農業技術、農業生態の実態を自分の目でたしかめてみたいという強い希望を持って、「環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源変容の地域間比較研究」（代表 山田勇、京大東南アジア研究所教授）に参加した。2003年2月に2週間であったがアッサム州とモニプリ州にはじめて足を踏み入れることができた。その後毎年1～2度の頻度で、アッサム州とアルナチャール・プラデーシュ州にでかけている。研究課題は、雲南省紅河県のハニ族が行っている棚田稲作のルーツとヒマラヤ東部地域での棚田の実態を確認することと、中国、東南アジアと南アジアを結び付けていたヒマラヤ東部の古道と知られている南西シルクロードを体験し、その役割を考えることであった。

1990年代中頃に京都府委託調査「都市の農村の共生関係確立調査」（代表 渡部忠世、農耕文化研究振興会代表）に私は参加した。京都府の農村をくまなく歩く機会を得、日本の中山間村の農村開発と棚田保全の問題に関心を抱くようになった。雲南やヒマラヤ東部は世界でも有数の中山間村と棚田地帯である。世界有数の棚田地帯に日本の現状を打開するヒントを得たいと願って、1999年9月と10月、2000年6～7月に、科研「異生態系接触に関わる人口移動と資源利用システムの変貌」（代表 古川久雄 京大大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授）への参加を通じて、それぞれ数週間であったが、雲南省紅河県甲寅郷の棚田地帯で調査を行なった。

日本では能登半島の輪島千枚田というように、千枚田という名前をつけて呼ばれる棚田地帯が全国にはすくなくならず分布している。これに習えば

甲寅郷のハニ族の棚田の規模は、万枚田、億枚田と呼ぶに相応しい。標高1300～2000mにかけての谷筋、尾根筋を問わず、山の斜面一面に棚田がつくられ、圧倒される棚田景観だった。棚田を乾かさないために冬季に棚田に水をため、犁を使わず鋤で起こし、一頭の水牛に耙をひかせて本田準備をする。甲寅郷では犁をつかわない特徴的な耕起と棚田維持方法がとられていた。

2003年3月にアッサム州カジランガ(Kajiranga)にあるホテル Wild Grass で宿泊した。カジランガは、アジア一角犀のライノが世界でもっとも多く生息する国立公園として有名である。アルナチャール・プラデーシュ州で人類学的調査を実施していたイギリス・ロンドン大学 SOAS のチームにホテルで偶然出会った。研究テーマについて話が弾んだ。雲南とヒマラヤ東部の関係や、雲南のハニ族の棚田農耕について話した。SOAS のチームメンバーが、アルナチャール・プラデーシュ州のジロのアパタニ族が無畜力による棚田稲作を行っていることを教えてくれ、ジロのハリ村出身のアパタニ族のコモさんにホテルであわせてくれた。2年後の2005年2月～3月に、コモさんを頼りに、ジロのアパタニ族の村をめざした。

雲南・甲寅郷のハニ族の村々とインドのアルナチャール・プラデーシュのアパタニ族の村に実際に身を置くことで、二つの地域が、私の中でつながった。つながっているという現場で得られたイメージに、資料や観察の記録によって具体的な輪郭を与えようとした試みが本稿である。本文で述べたように、ヒマラヤ東部と雲南は、南西シルクロードである「蜀身毒古道」と呼ばれる道によって紀元前後から往来が盛んであった。チベット＝ビルマ語群の諸民族の分布は、南西シルクロード沿いに多様に分布している。このことを下敷きにし、アパタニ族とハニ族の棚田稲作のルーツを焼畑的水田稲作と定義し、ヒマラヤ東部の広がりを雲南との関係から具体的に考察した。

アッサム・ブラマプトラ河谷での歴史が示しているように、チベット＝ビルマ語群諸民族の祖先となる人々は、紀元前10世紀頃から、ヒマラヤ東部から雲南にかけてかなり広く分布していたと推定できる。杉本正年氏が述べているように、その分布があつてこそ南西シルクロードがひらかれていったのだろう。チベット＝ビルマ語群諸民族

の祖先は、この時代から相互に交わりながら、さまざま民族を分化発展させてきた。気候と地形の類似性が高い、雲南南部とヒマラヤの南～東部では、双方向の人の移動があったとしても不思議ではない。私はむしろそう考えている。

チベット＝ビルマ語群諸民族は、一つのグループは、ヒマラヤの北面から四川にかけてのチベット高原において簡単な灌漑と小麦、大麦栽培、牧畜の農業体系を、もう一つグループは、ヒマラヤの南面から雲南にかけ、豊かなモンスーンの降雨に支えられた植生の回復力と水を支えに、焼畑と水田稲作、牧畜の農業体系を発展させた。これが本稿をまとめる過程で私の中に育ってきたヒマラヤ東部から雲南にかけてのチベット＝ビルマ族の生態資源利用に関する大まかな輪郭であり、私が行った「環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源変容の地域間比較研究」の成果である。

アパタニ族やハニ族の棚田文化は、シコクビエ移植方法をもった焼畑が発展したチベット＝ビルマ語群諸民族の人々の湿潤地域における山地適応稲作の到達点ではないかと思っている。アパタニ族の棚田稲作は農業生態系からみても高度に合理的であり、体系化された技術内容となっている。このことは紅河県甲寅郷のハニ族の棚田稲作についても同様に指摘できる⁽¹²⁾。アパタニ族やハニ族の棚田稲作は、アジア稲作の中の独立した山地棚田稲作類型とみなせるだろう。

チベット＝ビルマ語群諸民族の人々の湿潤適応地域は、日本文化のルーツの一つと考えられている照葉樹林帯文化のセンターである東亜半月弧⁽³¹⁾に重なる。ハリ村での聞き取りによればタニ・グループの諸民族は、アルナチャール・ブラデーシュ州東部の中国チベット自治区の国境あたりを出発点として南下してきたという共通の伝説をもっている。中国政府発行の旅行案内書によればチベット自治区の林芝（ニンティ）には、標高1000～2000mに水田がまとまって存在していると説明されている。林芝の水田稲作が相当に古いものであったなら、アパタニ族がジロに到着する以前に水田稲作技術をもっていた確固な状況証拠となる。是非確かめてみたい今後の大きな課題である。

蜀身毒古道と呼ばれた西南シルクロードが幹と

なったトラバースルートは人々の往来のネットワークであったとも言えるだろう。トラバースルートのネットワークは東亜半月弧で「往来がつくった暮らしの文化」とでも言える照葉樹林文化⁽³¹⁾を育てあげたのである。1970年代はじめに提唱された東亜半月弧という「地域」横断的である地域のくくり方は、生態学者の中尾佐助氏の自由な発想の創造である。地域の枠組みに囚われない自由な発想に私を含めて海外をフィールドとする地域研究者は、地域研究が制度化された現在であるからこそ、学ぶ必要があるように私には思える。

南アジア、東南アジア、東アジアと研究対象地域を行政制度的な地域の枠組みでくくってしまうと、ヒマラヤ東部から雲南にかけたチベット＝ビルマ語群の諸民族のように、地域の枠組みを横断し狭間地域で暮らしてきた人々の世界が見えにくくなってしまう。「環ヒマラヤ広域圏」とい地域設定は、南アジア、東南アジア、東アジアという地域観に無意識（意識的？）に慣れ親しんでしまった私たち地域研究者に反省を促しているのである。行政制度的な地域の枠組みは、枠組みで閉じた世界をつくっていると錯覚をいだかせやすい。この地域研究の行政的な枠組みの設定のあり方自体をたえず再検討する必要性を喚起しているのである。

「環ヒマラヤ広域圏」では、私はヒマラヤ東部を2次元的な領域的な広がりの中で捉えていた。高所環境としてのヒマラヤ東部の位置づけがかならずしもなされていなかった。高山病を起すようなチベット高原などの高所環境は、素人的に考えれば、人体生理上、低所環境に適応した人間にとっては、よほどの理由がないかぎり、生活適地とはならないだろう。チベット＝ビルマ語群諸民族の一部は、今もチベット高原という高所環境で生活し、在地の技術、在地の知恵を活用し順化・適応してきた。チベット高原に現在も暮らすチベット＝ビルマ語族諸民族は、いったいつの時代から、チベット高原という高所環境に暮らしはじめたのか？その理由は？生業的な優位条件はなんだったのか？一方、チベット＝ビルマ語族諸民族の一部は、すっかり順化・適応した（？）高所環境から、古い時代に、チベット高原を南下したのはなぜなのだろうか？その理由は？とくに生業的優位条件

が働いていたのだろうか？次々と疑問にぶつかる。

民族の移動には支配と対立の民族間抗争が大きく影響していることが十分に背景として考えられるが、私は、暮らしと生産の問題として、民族の移動をまずは整理することが必要だと考えている。地域に暮らすという主体的意志力が再編した生業と自然、社会環境との相互関係の曼荼羅的構造が農業生態系であり、その変化・発展が民族の移動にもなって生起する。支配者や権力者と呼ばれる一握りの人を除けば、圧倒的な「庶民」には、食を得、安全に暮らすことがもっとも重要である。ヒマラヤ東部から雲南での民族の移動は、高所から低所を含む3次元的なマイクロ、メソ空間の中で生起している。高所、低所という生活、生産を営む上で大きな差がある自然環境の変化を取り込んで、農業生態系を再編するという人間の主体的意志力が必要とされた移動であったということが言えるのではなかろうか。

私たちは人々の暮らしを中心にした地域の捉え方をする場合、どうしてもマイクロ、メソ的に地域を2次元的な広がりとして無意識に眺めてしまうが、チベット＝ビルマ語群諸族の移動と彼らの暮らしを理解するためには、高所、低所という3次元的な広がりを絶えず意識しながら、地域を捉えていかなければならない。今後は、高所、低所に広がる生態環境のニッチェを基盤とした地域単位が相互関連をたもち大きな地域として自らを組織化していくヒマラヤ東部の地域体系を農業生態系の側面から明らかにし、チベット＝ビルマ語族諸民族の移動を辿ってみたい。

謝辞

中国語文献の和訳、雲南南部でのシコクビエ栽培に関する教示について、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科院生安達真平氏には大変お世話になった。カムループ大学（Kamrup College）の歴史学科長 Deben Das 氏からキラータについて教示と文献の提示を受けた。本稿の出発点となった報告書は、科学研究基盤研究(A)(2)「環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源変容の地域間比較研究」に参加することから生まれた。上記科研代表者である京大名誉教授山田勇先生には、ヒマラヤ東部地域の中核であるアルナチャー

ル・プラデーシュ州、アッサム州での調査の機会を与えていただいたとともに、環ヒマラヤ広域圏という斬新な着想による視点により広く地域を捉える発想の重要性を教示していただいた。また、加筆、修正したと言え、私の上記科研報告書の『ヒマラヤ学誌』への掲載を快諾していただいた。上記科研報告書の編集を担当された帯広畜産大学畜産科学科助教授平田昌弘氏には本報告の出発点となった私の報告書の完成を粘り強く待っていただいた。同氏の忍耐が私の発想を報告書に結実させたといっても過言ではないだろう。最後になったが、京大東南アジア研究所教授松林公藏氏には『ヒマラヤ学誌』投稿の機会を与えていただいた。以上の方々に、特に、記して感謝の意を表します。

引用文献

- (1) 李 期博 編『哈尼族梯田文化論集』雲南民族出版社 2000.
- (2) 田畑久夫ほか 『中国少数民族事典』東京堂出版 2001 : 147 - 148.
- (3) 宋恩常 編『雲南の少数民族』日本放送出版協会 1990 : 27 - 32, 38 - 47.
- (4) 安藤和雄・河合明宣 「インド・アルナチャールプラデーシュ、アバタニ族の無犁稲作に関する予備的調査」熱帯農業 49 巻別号 2、2005 : 17 - 18.
- (5) 安藤和雄「南西シルクロードと焼畑的水田稲作からみたヒマラヤ東部地域の広がり—資料整理と覚書—」『環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源変容の地域間比較研究—平成14年度～平成17年度科学研究補助金（基盤研究(A)(2)研究成果報告書）（研究者代表 山田勇）、2006:27 - 51.
- (6) 杉本正年「日本基層文化の整理学」明泉堂 1987 : 172 - 173.
- (7) Baruah S.L. A Comprehensive History of Assam, Munshiam Manoharlal Publishers, 2002:221-222.
- (8) 張 宏臻「ハニ棚田の原風景—ハニ棚田の価値と文化的内包—」『日本の原風景・棚田』第6号 2005 : 34 - 39.
- (9) Acharyya N.N. A brief History of Assam. Omsons Publications. 1966 : 7-8.
- (10) Chatterji, Suni Kumar. The Place of Assam in the history and Civilisation of Inida. Banikanta

- Kakati Memorial Lectures,1954. Guhati University,1991(1955):16.
- (11) 雲南省少数民族古書整理出版規劃辦公室編『哈尼阿培聰坡坡』1986 : p38.
- (12) 安藤和雄 「雲南紅河県哈尼俗の棚田農業—アジアの原風景—」『棚田学会誌・日本の原風景・棚田』第6号 2005年7月 : 9 - 19.
- (13) クリスチャン・ダニエル「タイ系民族の王国形成と物質文化—13～16世紀を中心にして—」『黄金の四角地帯—シャン文化圏の歴史・言語・民族』慶友社、1998 : 152 - 217.
- (14) Smart.R.B (Compiled). Burma Gazetteer AKYAB DISTRICT. Rangoon Superintendent Government Printing,1917:20-21.
- (15) 安藤和雄 「バングラデシュとミャンマーの少数民族における持続的農業と農村開発—3. ビルマ壟とベンガル壟の分布の変遷に関する予備的考察」『熱帯農業』第47巻別号1, 日本熱帯農業学会, 2003 : 87-88.
- (16) 朝岡康二『野鍛冶』法政大学出版局 1998 : 7.
- (17) 渡部武『雲南少数民族伝統生産工具図録』慶友社 1997 : 65-94.
- (18) 「中国の製鉄技術」(「技術史」メモ by 佐野正博 <明治大学経学部>)
http://www.isc.meiji.ac.jp/~sano/htst/History_of_Technology/History_of_Iron/History_of_Iron_China01.htm (2006年6月29日)
- (19) 飯沼二郎『風土と歴史』岩波書店 1974:28.
- (20) 古島敏雄『概説 日本農業技術史』養賢堂 1953:76.
- (21) 河野通明『日本農耕具史の基礎的研究』和泉書院 1994:41.
- (22) 佐々木高明『東・南アジア農耕論』弘文堂 1989 : 7 - 16.
- (23) 尹紹亭『雲南の焼畑—人類生態学的研究—』(白坂蕃 訳) 農林統計協会 2000:1.
- (24) Takhe Kani, The Advancing Apatanis of Arnachal Pradesh, Mrs Takhe Omang,1993:12.
- (25) Haimendorf.C.F. The Apa Tanis and Their Neighbourings-A Primitive Civilaization of the Eastern Himalayas. Routledge & Kegan Pul Ltd. 1962:24-25)
- (26) Takhe Kani, The Advancing Apatanis of Arnachal Pradesh, Mrs Takhe Omang,1993:178.
- (27) Tob Tarin Tara, Nishi World, Eastern Horizon,2005:190-191.
- (28) 王清華『棚田文化論』雲南大学出版 1999 : 266-268.
- (29) 大林太良「華南少数民族の作物起源神話」『アジア諸民族の歴史と文化』六興出版 1990:37 - 51.
- (30) 伊藤清司『中国民話の旅から—雲貴高原の稲作伝承—』日本放送出版協会 1985 : 167-168.
- (31) 上山春平・佐々木高明・中尾佐助『続・照葉樹林文化』中央公論社 1996 : 184 - 216.

Summary

From Southwestern Silk Road and Swidden Wet Rice Cultivation: An Introduction to An Area Systems Study from an Eastern Himalayan Perspective

Kazuo Ando

Center for Southeast Asian Studies Kyoto University

This paper analyzes the extent to which the eastern Himalayan world has made itself felt in the following 1) the various Tibet-Burman language groups that are distributed along the Southwestern Silk Road; 2) Wet rice cultivation by the Hani People of Southern Yunnan, and the Apatani People of Arnachal Pradesh, both of which may share the same origin of their swidden wet rice cultivation; 3) the similar tropical monsoon weather of the eastern Himalaya and southern Yunnan. It proposes the working hypothesis that Tibet-Burman language groups like Hani and Apatani may have moved around between the southern Yunnan and the eastern Himalaya in or around B.C. 10 C via the Southwestern Silk Road. One of Hani sub-groups may have also migrated in search for suitable places for swidden wet rice cultivation in hilly areas between the southern Yunnan and the eastern Himalaya.